

# 幕下格以下行司の階級色

根 間 弘 海

## 1. はじめに<sup>1)</sup>

明治43年5月、行司装束を袴袴から鎧直垂・烏帽子に変えたとき、装束の菊綴や括り紐などの色は軍配房の色と一致することになった。そのとき、幕下格以下の行司は黒となっていた。つまり、幕下格以下の行司の階級色は黒であった。

現在の幕下格以下の行司の階級色は、相撲協会寄附行為施行細則の「審判規則」(行司)の第20条によると、黒か青である。つまり、明治43年5月にはなかった青が使用されている。

明治43年5月、行司の階級色を決めたとき、その色は協会の規定に反映されず、新聞で公表している<sup>2)</sup>。協会の内規として文書化されたものがあるかもしれないが、階級色が公的になったのは新聞である。

それでは、現在の規定のように、行司の色を規定に明記したのはいつ頃なのか。実は、昭和3年の規定に初めて明記されているが、その色は幕内格以上のもので、十枚目格と幕下格以下の色については何も言及されていない。昭和3年の規定では足袋格、つまり十枚目格が力士の十枚目に対等することが明記されているだけである。十枚目格と幕下格以下の階級色について規定で明記したのは、昭和30年になってからである。その規定が、基本的には、現在まで続いていると言って差し支えない。

ところが、幕下格以下の色は黒か青でなく、幕下格から三段目格までは青、序二段格以下は黒だとする文献がたくさんある。つまり、幕下格以下の行司の中で、黒と青が使い分けされているのである。実際に、このような色の使い分けがあったのか、あったとすればいつ頃始まったのか、興味のあるところである。

本稿の目的は、幕下格以下の階級色である黒と青に焦点を絞り、それについてどのようなことが言われてきたかを文献で確認することである。特に関心を持って調べるのは、主として、次のようなことである。

- (1) 明治43年5月に、幕下格以下の行司は黒と決まったが、その黒とともに、青が使用されるようになったのはいつ頃か。
- (2) 幕下格以下の行司の色はいつ頃、協会の規定に明記されるようになったか。
- (3) 幕下格以下の行司を2つに細分化し、幕下格から三段目格までを青、序二段格以下を黒とする記述が多く見られる。そのような記述はいつ頃から始まり、いつまで続いているか。
- (4) 明治43年5月以降、幕下格以下の行司は一貫して黒か青だったのに、なぜ幕下格から三段目格までを青、序二段格以下を黒として記述しているのか。
- (5) 幕下格以下の行司を二分化するか否かに関わらず、その階級色は黒と青だが、そうではないという文献もある。すなわち、十両格以上の色を留色とし、それ以外の色なら、どんな色でもよいというのである。それは事実を反映しているか。
- (6) 明治43年5月ごろは、幕下格以下の行司は黒だったのに、いつ頃から青が多く使用されるようになったのか。それはどうしてか。
- (7) 現在（平成19年1月）、幕下格以下の行司は、すべてと言っていいくらい、青を使用している。いつ頃からそのように変わったか。

これから、どの文献でどんなことが書いてあるかを具体的に見ていくことにする。

## 2. 明治時代

明治43年5月の新聞によると、幕下格以下の行司は黒である。その黒は、おそらく、それ以前も同じだったに違いない。明治30年頃には、行司の階級色はすでに決まっていたが、やはり幕下格以下は黒だったのである<sup>3)</sup>。それは、『相撲大全』（山田編，明治35年）の記述でも確認できる。

「行司役の等級は力士同様なるが、これを区別するにその使用する団扇の総をもって分ける。最初の前，中，序ノ口，序二段，三段目，幕下までは黒糸の総を使用し，（後略）」(p. 34)

幕下格以下の行司が黒であることは、その後、一貫して変わらず、現在でも受け継がれている。相撲関係の文献では、時代を問わず、その黒は不変である。

ところが、明治43年5月31日の『都新聞』に次のような記述がある。

「行司の足袋以下は黒，青の二種である」

「足袋以下」とは「はだし行司」のことで、幕下格以下の行司である。幕下格以下の行司が黒と青だったことを述べてある文献としては、明治43年当時、『都新聞』以外にない。それだけ、この新聞の記事は貴重である。これを書いた記者は青がもう一つの選択肢であることを相撲関係者から聞いていたに違いない。

それにしても、なぜ明治43年当時、『都新聞』以外にこの青について言及していないのか、不思議である。推測の域を出ないが、当時、幕下格以下の行司は青の房を使用していなかったかもしれない。それで、青のこと

があまり気にならなかったかもしれない。

ところが、明治44年6月10日の『時事新報』に次のような記述がある。

「行司の資格はその持っている軍配の総の色で区別されている。すなわち、序ノ口から三段目までは一様に黒い総を用い、幕下は青、十両は青白、(後略)」

青の房が使用されているが、その青は幕下格行司の階級色となり、黒は三段目格以下の階級色となっている。つまり、幕下格以下の行司の中で、色の使い分けをしている。いずれにしても、当時、青も使われていた可能性が高い。ただその数は少なかったようだ<sup>4)</sup>。

### 3. 大正時代

大正5年5月号の『野球界』の「行司と呼出し」(角道隠士)も、次の記述にあるように、明治44年6月10日の『時事新報』と同じである<sup>5)</sup>。

「序の口から三段目迄が黒の房、幕下格が青、十両格が青と白の染め分け、(後略)」(p.54)

大正10年5月号の『武侠世界』の「行司の階級」(p.98)にも同様の記述が見られる。すなわち、序ノ口格から三段目格までは黒房、幕下格は青房である<sup>6)</sup>。

明治43年の『都新聞』にしても、大正5年の『野球界』にしても、また大正10年の『武侠世界』にしても、幕下格以下の行司を2つに細分化し、上位の幕下格を青、三段目以下を黒としている。しかし、そのような取り決めが実際にあったかどうか疑わしい。少なくともそれを裏づける資料はまだ確認できていない。これは、おそらく、それを書いた人の勘違いによ

るものであろう。

たとえば、大正3年の『一味清風』（綾川著）には、幕下格以下の行司の階級色について、次のように述べている。

「黒糸格式 これは行司の第一年生で力士の前相撲，本中，序の口，序二段，三段目，幕下（番付の第二段目中十両を除きたるもの）に相当する行司の階級で黒糸の総を団扇につけているものである。」  
(p.194)

この『一味清風』（大正3年）は『野球界』（大正5年）より2年ほど前に出版されているが、幕下格も黒だと述べている。青について何も言及されていないのは確かに不思議だが、これは当時の文献では普通のことである。昭和初期までの文献ではほとんどすべてと言っていいくらい、幕下格以下は黒となっている。

大正8年出版の『相撲講話』（田中著）にも大正3年出版の『一味清風』（綾川著）と同様の記述がある<sup>7)</sup>。

「黒糸格：これが一番初歩最下級の格で，軍扇はすべて黒糸の総がついている。ここにても本中，序の口，序の二段，三段目，幕下に相当する割当てはできているが，それは内輪の定めで，見たところはいずれも素足で黒総だから，そこまでの区別は見ただけでは判らない。」  
(p.226)

この記述によると、幕下格以下はすべて黒である。やはり青についての言及はない。なぜ青についての言及がないか不思議だが、それは、黒がはるかに多く使われていたからかもしれない。記述の中に「見たところ」という表現があるように、著者は実際に行司の房の色を確認している節がある。

この『相撲講話』（田中著）の記述が正しければ、大正8年当時、黒が

青より多く使われていたことになる。そうすると、青が黒より多く使われるようになったのは、少なくとも大正8年以降である。

幕下格以下を2つに細分化することは同じだが、その分け方で違うものがある。つまり、幕下格から三段目格を青、序二段格以下を黒とするものである。たとえば、大正10年5月号の『野球界夏場所相撲号』の「行司さん物語 紫総を許される迄」(式守與太夫・他)に、次のような記述がある。

「その幕下までが緑総なのです。」(p.104)

この「緑総」は「青房」と同じである。幕下格は青とはっきり述べてあるが、三段目格以下については必ずしも明確でない。しかし、この記述は「三段目に出世する」という小見出しの中で述べているので、文脈から推測して青は幕下格と三段目格の色だと判断してよい。そうすると、序二段格以下は間違いなく黒である。

幕下格以下の階級色について明治43年から大正末期までの文献を見ると、黒に加えて青も使われていたことが分かる。ただどの程度青が使われていたかとなると、はっきりしたことは言えない。文献の記述から判断する限り、黒が青より圧倒的に使用されていた可能性がある。しかし、どの程度圧倒的なのかとなると分からない。黒と青の割合は、残念ながら、文献ではまだ確認できないのである。

#### 4. 相撲規定の行司階級色

行司の階級色を相撲規定に明記したのは、昭和3年の寄附行為施行細則、第3章の「年寄、力士及び行司」(第25条)である。それには、次のように明記されている。

- (a) 総紫は横綱に

- (b) 紫白総は大関に
- (c) 紅白及び緋総は幕内より関脇までの力士
- (d) 足袋格は十両格の力士（『近世日本相撲史』（第1巻），p.76）

不思議なことに、「はだし行司」の幕下格以下の色については、何も言及されていない。同様に、十枚目格の色についても言及されていない。なぜ十枚目格以下の階級色について記していないのか、その理由が知りたいのだが、それを述べてある文献は見たことがない。記さなかったのには、何か理由があるはずだ。

相撲規定で幕下格以下の行司の階級色について最初に述べたのは、昭和30年5月である。その規定によると、次のようになっている。

- (1) 立行司
  - (a) 庄之助：総紫
  - (b) 伊之助：紫白
- (2) 副立行司
  - (a) 玉之助：紫白
  - (b) 正直：紫白
- (3) 三役行司：朱
- (4) 幕内行司：紅白
- (5) 十枚目行司：青白
- (6) 幕下二段目以下：黒又は青（『近世日本相撲史』（第4巻），p.33）

昭和26年には新たに副立行司が設けられたが、その色は式守伊之助と同様に紫白だった<sup>8)</sup>。しかし、規定には記されていないが、同じ紫白でも色の割合が式守伊之助と副立行司では異なる。つまり、副立行司は紫と白がほぼ半々の割合だが、式守伊之助は紫の中に白が少し混じる程度である。

昭和30年の規定で初めて、幕下格以下は黒か青として明文化された。それまでは、青は内規として存在していたか、慣習的に使用していたか、そのいずれかであろう。明治43年5月で階級色は決まっているが、それは「規定」としては明記されていない。新聞で公表されたものが「規定」だと言えば、その通りかもしれないが、昭和30年まで明確に階級色を記した規定はないのである。

昭和35年1月、行司の定年制実施に伴い、副立行司が廃止されたため、それに伴って副立行司の階級色もなくなった。昭和35年に改定された寄附行為施行細則、審判規定、「行司」の第24条は、次のようになっている。

- (1) 立行司
  - (a) 庄之助： 総紫
  - (b) 伊之助： 紫白
- (2) 三役行司：朱
- (3) 幕内行司：紅白
- (4) 十枚目行司：青白（『近世日本相撲史』（第4巻），p.33）
- (5) 幕下二段目以下：黒又は青

この階級色がそのまま、現在でも生きている。幕下格以下は黒または青として昭和30年の規定に初めて記されたが、それ以前からこの2つの色は幕下格以下では使用されていた。しかし、幕下格以下の行司の階級色を見る限り、規定はすべてではない。規定には記されていないが、黒とともに青も使用していたからである。

## 5. 幕下格以下行司の二分化

明治44年6月10日の『時事新報』と大正5年5月号の『野球界』で、幕下格を青、三段目格以下を黒として区別しているが、実は、これと異なる



二分化をしている文献が数多く見られる。つまり、幕下格から三段目格までを青、序二段格以下を黒とするものである。その一つは大正10年5月号の『野球界夏場所相撲号』である。昭和時代になると、このような分け方をしている文献はたくさん見られる。そのいくつかをここでは示そう。

- (1) 昭和4年1月号『春場所相撲号刊』（野球界臨時増刊）の「行司の資格」という見出しの記事の中で、次のような記述がある。

「青白の房：序の口及び序二段目格に相当し最下位のもの。青房：三段目及び幕下格（但し十両を除く俗に二段目と言う）に相当する」  
(p.97)

序ノ口と序二段を「青白」としているのは、明らかに間違いである。黒とするのが正しい。どういうわけか、この記事では十枚目格を「紅白」、幕内格を「緋」としている。これも間違いである。分け方と色の規定には間違いがあるが、幕下格以下の行司は2つの色で区別されている。

昭和5年出版の『相撲の話』（大ノ里）には、幕下格以下は黒だと次のように述べてある。

「これは所謂行司の一年生であって、力士の前角力、本中、序ノ口、序二段、三段目、十両を除いた幕下に相当するもので、黒糸の総を軍配につけている。」(p.54)

青については何も言及されていないが、もし幕下格以下で青と黒の階級色が明確に区別されていたなら、何らかの形で青についても言及されていたに違いない。

- (2) 昭和17年出版の『相撲』（加藤著）でも、同様の記述がある。

「…青が幕下と三段目、黒が一番下で序二段以下前相撲までに相当している。」(p.173)

昭和17年当時は、前相撲もあったので、前相撲格の行司も黒を使用している。幕下格以下の行司をこのように2つに細分化し、幕下格と三段目格を青、序二段以下を黒としているが、このような分け方は、実際は、存在していなかった。

たとえば、昭和17年、『国技勸進相撲』（20代木村庄之助（松翁））には次のような記述がある。

「序ノ口、序二段、三段目、幕下の行司は土俵上素足で、青と黒の房を使用致します。」(p. 54)

つまり、幕下格以下は青か黒である。幕下格以下を2つに細分化して、青と黒で区別していない。この『国技勸進相撲』は20代木村庄之助が書いたものであり、信用して間違いない文献である<sup>9)</sup>。

(3) 昭和27年『相撲読本』（彦山著）

「『黒』は前相撲から序二段までにあたり、『青』は三段目から幕下までに相当する。」(p. 170)

これは、明らかに彦山氏の間違いである。というのは、昭和30には行司の階級色が青か黒として明確に規定されていないが、その頃までは黒か青であった。

(4) 昭和32年『行司と呼出し』（木村・前原著）

「行司の階級は、軍配の房の色で識別していただくのが、もっとも明瞭である。幕下までは土俵上素足で序ノ口、序二段は黒房、三段目、幕下は青房で区別されるが、現在は黒房はほとんど使われていない。」(p. 66)

この『行司と呼出し』の著者の一人は木村庄之助（22代）だが、幕下格から三段目格までを青、序二段格以下を黒として記述している。これは明らかに相撲規定に反する。昭和30年5月には行司の階級色は幕下格まで規定で記されている。行司が規定に反した階級色を使うということはない話だ。木村庄之助（22代）の勘違いか、この部分だけゴーストライターが説明を加えたかである<sup>100</sup>。いずれにしろ、昭和30年以降、幕下格以下を二分し、青と赤で区別している文献はすべて、間違いであると断言してよい。

この記述の中でもう一つ興味を引くのは、昭和32年当時、黒房がほとんど使われていないということである。いつ頃から黒房に代わって青房が多く使われるようになったか、はっきりしないが、少なくとも昭和14年頃は黒房が多かったに違いない。というのは、昭和14年1月号『野球界』に「行司の見分け法」という小見出しがあり、その中に次のような記述があるからである。

「黒糸格式：これは行司の1年生で、力士の幕下以下に相当するものです。土俵で足袋をはくことは許されてありません。黒糸縫を軍配につけています」(p.171)

もし幕下以下の行司が青房を多く使っていたならば、青についても言及しているはずである。青房が黒房より多く使われるようになったのは、おそらく、戦後であろう。もしかすると、20年代後半あたりかもしれない。生活が豊かになり、色の鮮やかさを意識するようになったのは、おそらく、20年代後半であろう。しかし、これを確認する資料を見たことがないので、確実なことは言えない。

黒房より青房が多く用いられるようになったのは、カラー写真やテレビ映りと大いに関係があるかもしれないが、どうもそれより生活の安定が先のような気がする。なぜなら、カラー写真やカラーテレビが一般に普及し

たのは昭和30年代に入ってからだからである。

## 6. 青や黒以外の色

幕下格以下を黒か青としようが、幕下格から三段目までを青、序二段格以下を黒としようが、黒と青の二色は決められた色である。それ以外の色は使用されないはずである。しかし、黒と青はたまたまそういう色を用いているだけで、別の色を用いてもかまわないという文献がある。それは、昭和16年出版の『近代力士生活物語』（藤島著）である。それに、次のような記述がある。

「幕下以下は何色なにいろを使用してもいいが、前述した房の色は留色とめいろと言って使用することを禁止されている。」(p.87)

「前述した房の色」というのは、十枚目格以上の階級色である。この色とめいろを留色と呼び、幕下格以下はその留色とめいろ以外の色であれば、どの色を使ってもかまわないというのである。『近代力士生活物語』は元横綱・常の花で、これを出版した頃は理事でもあったので、この記述はそれだけ重みがある。

幕下格以下は、実際に、留色とめいろ以外の色を使ってもよいということがあったのだろうか。幕下格以下は階級色として定まった色はないという思い込みによるものではないだろうか。留色とめいろ以外の色を使ってもよいというのは、著者の間違った思い込みによるものである。それは、少なくとも次の四つの理由による。

- (1) 一つ目は、もしそれが真実だったなら、黒や青以外の色が実際に使われていても不思議ではないが、そのような事実がないことである。
- (2) 二つ目は、黒や青以外の色の使用を裏付ける資料は、『近代力士生活物語』の他にないことである。
- (3) 三つ目は、昭和16年ごろに出版された『相撲』（加藤著、昭和17年、

p. 173) や『国技勲進相撲』(20代木村庄之助著, 昭和17年, p. 54) では、黒や青を使うというのが記述されていることである。

- (4) 四つ目は、黒は最も低い階級色として明治43年5月に行司装束を変えたときに定まっていたことである。青もそのときもう一つの選択肢として決められた可能性がある。

「<sup>とめいろ</sup>留色」以外の色ならどの色を使用してもよいという『近代力士生活物語』の記述は、最初、半信半疑だったので、他にそれと同じことを述べている文献がないか調べてみた。一つだけ見つけることができた。それは、『大相撲』(昭和31年9月号, pp. 28-29) である<sup>11)</sup>。その記述が正しいかどうかは、吟味する必要がある。

## 7. 青と黒

幕下格以下は黒か青なのに、幕下格以下を二分し、上位を青、下位を黒としている文献がたくさんあることはこれまで見てきた。二分化には二つある。一つは幕下格を青、三段目格以下を黒とするものである。もう一つは、幕下格から三段目格までを青、序二段格以下を黒とするものである。大正10年後は、後者が圧倒的に多い。

分け方は別にして、上位を青、下位を黒とするのは、どちらにも共通している。それでは、なぜ上位を青、下位を黒としているのだろうか。なぜその反対はないのだろうか。それについて、少しばかり考えてみよう。

明治43年5月に行司の階級色を決めたときは、上のほうから紫、赤(緋)、緑、青、黒という順序であった。この色の順序は、黒を除いて、風見著『相撲、国技となる』(pp. 127-132) にも述べてあるように、「平安時代に制定された臣下の階級を示す色」(p. 128) である。行司の階級色では、紫と赤は純粹色を上位、「白」を混ぜたものを下位としている。緑と青は一

つに統一し、青白を十枚目格とした。本来なら、青を上位にし、青白を下位にすれば、色の一貫性は維持できる。しかし、理由は定かでないが、青白を十枚目格にしている。黒は「相当する臣下の階級がない」(p.129)ので、幕下格以下をそれに当てている。

明治43年当時、幕下格以下が黒だったのは色の順序から当然だった。しかし、時が経つうちに、青も使用されるようになった。すなわち、黒と青が共存したのである。そのとき、色の順序では、青が黒より上にあるため、間違っただけで幕下格以下の上位を青、下位を黒で表すようになったのであろう。これは協会の定めとは違うが、誰かがその順序を公表し、それを他の人が真似たに違いない。協会の定めた色を吟味すれば、上位を青、下位を黒とするのは間違いであることに気づくはずだが、そういう吟味をせず、孫引きしたり<sup>12)</sup>、思い込みで勝手に判断したのだらう。それが、結果的に、平成5年まで続いたことになる。

明治43年に行司の階級色が決まったが、その色は突然、そのときに決まったわけではない。江戸時代から日本人の中には色の順序が伝統的に決まっていた節がある。というのは、『相撲家伝鈔』(正徳4年(1714))にあるように、上位の行司は紫、その下位の行司は「紅」(緋)だったからである。明治初期にも紫、紫白、紅、紅白というように、順序が決まっていた。それに、青白も加わるようになっていく。明治30年前半にはすでに、青を除いて、色の順序は決まっていた。このように見てくると、明治43年に定めた行司の階級色は、それまでの色を追認しただけである。

不思議なことに、青も明治43年以前から使われていたのかどうか、分からない。青白があったのだから、青があって自然である。純粹色が先にあって、それに白を混ぜるのが後だからである。しかし、これまでのところ、明治43年以前に青を階級色として確認できる資料は見つかっていない。色の順序からすれば、見つかっても不思議でないが、それがどうしても見つからないのである。青が階級色の一つとして最初に確認できるのは、明治

43年5月31日の『都新聞』である。

幕下格の上位で青を使用したくなるのは、色の順序を維持したいという心理が働いているかもしれない。十枚目格の階級色は青白として定まっているために、それを変更することはできない。それで、幕下格以下で使用されている黒と青の中で、青を上位の色、黒を下位の色とすれば色の順序が維持できる。その分け方は事実と反するが、思い込みで勝手にそういう色の分け方をしたかもしれない。青が上位の色、黒が下位の色という伝統的な色の順序には合致しているが、そういう2つの階級色は、実際は、なかったのである。

幕下格以下で上位を青、下位を黒とした理由は、実は、もっと他にあるかもしれない。それについて述べた文献をくまなく探してみたが、今までのところ、そのような文献はまだ見ていない。また、見つかったとしても、それは一つの推論に過ぎない可能性がある。これは、結局、本当のことが分からない問題かもしれない。

## 8. 資料

幕下格以下を二分していても、その分け方には二通りある。一つは、幕下格を青、三段目格以下を黒とするものである。もう一つは、幕下格と三段目格を青、序二段格以下を黒とするものである<sup>13)</sup>。

幕下格を青、三段目格以下を黒として区分する文献には、次のようなものがある。これは、かなり少ない。

- (1) 『時事新報』(明治44年6月10日)
- (2) 『野球界』(大正5年5月号, p. 54)
- (3) 『お相撲さん物語』(大正7年, pp. 226-227)
- (4) 『武俠世界』(大正10年5月号, p. 98)

幕下格と三段目格を青、序二段格以下を黒として区分する文献には、次のようなものがある。これは、圧倒的に多い

- (1) 『野球界夏場所相撲号』（大正10年5月号, p.104）
- (2) 『春場所相撲号刊』（昭和4年1月, 野球界臨時増刊, p.97）
- (3) 『相撲道綜鑑』（彦山著, 昭和15年, p.505）／復刻版, 昭和52年.
- (4) 『相撲美開眼』（彦山著, 昭和16年, p.75）
- (5) 『近代力士生活物語』（昭和16年, p.87）
- (6) 『相撲』（加藤著, 昭和17年, p.173）
- (7) 『相撲記』（舟橋著, 昭和18年, pp.65-66）
- (8) 『相撲読本』（彦山著, 昭和27年, p.170）
- (9) 『新版相撲通になるまで』（昭和28年11月, 『相撲』増刊）
- (10) 『相撲今と昔』（アサヒ写真ブック11, 昭和29年, 朝日新聞社）
- (11) 『相撲』（昭和29年10月号, p.37）<sup>14)</sup>
- (12) 『大相撲』（昭和29年4月号, p.60）
- (13) 『相撲豆辞典』の「行司の階級」（昭和30年5月, 朝日新聞）
- (14) 『相撲大観』（『相撲』増刊, 昭和30年7月, pp.89-90）
- (15) 『大相撲』（昭和31年9月号, pp.28-29）
- (16) 『行司と呼出し』（木村・前原著, 昭和32年, pp.66）
- (17) 『大相撲』（昭和40年8月号, p.139）
- (18) 『江戸時代大相撲』（古河著, 昭和43年, p.320）
- (19) 『相撲もの知り博士』（中沢著, 昭和52年, p.230）
- (20) 『図録「日本相撲史」総覧』（平成2年, p.251）
- (21) 『大相撲こてんごてん』（半藤著, 平成3年, p.57）
- (22) 『日本相撲大鑑』（窪寺著, 平成4年, p.98）
- (23) 『物語日本相撲史』（川端著, 平成5年, p.36）

これ以外にも同様の記述をしている文献はあるが、これくらいで十分で



あろう。これらの文献は、もちろん、行司の階級色の記述に関しては間違っている。現在の行司の階級色であれば、規定をまず調べることである。歴史的に遡る場合は、明治30年ごろから黒が先にあったことを知っておく必要がある。青も明治43年に導入された可能性があるが、それは別の階級色ではなかったのである。

## 9. おわりに

幕内格以下の行司の階級色である黒と青を巡って、どのようなことが文献に書いてあるかを見てきた。冒頭の「はじめて」で簡条書きに示した7項目にポイントを絞り、できるだけ具体的な資料を文献で調べてきたが、その7項目に関することを最後に簡単にまとめておきたい。

- (1) 青の使用は明治43年から認められている。それは明治43年5月31日の『都新聞』で確認できる。
- (2) 幕下格以下の行司の色を規定で明記したのは、昭和30年である。そのとき、十枚目格行司の階級色も明文化された。
- (3) 明治44年6月10日の『時事新報』に幕下格を青とし、三段目格以下を黒として区別する記述が見られる。同様な記述は、大正5年5月号の『野球界』、大正10年5月号の『武俠世界』でも見られる。しかし、大正10年の『野球界』を初めてし、幕下格以下の行司を幕下格から三段目格までを青、序二段格以下を黒としている。そのような記述は多くの文献で見られるが、それは平成4年の文献でも見られる。このような幕下格以下の二分化は明治44年以降続いているが、そのような文献はすべて誤りである。実際は、明治43年以降、幕下格以下の階級色は、一貫して青か黒であった。階級色としての黒は、それ以前からあった可能性が高い。
- (4) なぜ幕下格から三段目格までを青、序二段格以下を黒として誤って

区別したのか、その理由は分からない。またその理由を明記した文献もない。青は黒より上位色として見られていたので、そのような分け分け方をしたかもしれない。日本には平安時代から色の順序として紫、緋、緑、青があり、その伝統に基づいて青を黒より上位に置くようになったかもしれない。黒は、服装の色としては青よりも下位である。

- (5) 幕下格以下の行司は留色以外なら、どんな色を使用してもよいというのは、たとえば、『現代力士生活物語』（藤島著）や『大相撲』（昭和31年9月号、pp.28-29）に見られるが、それは、たぶん、真実ではないであろう。この「留色」とは、十枚目格以上で使用される色を指している。

青は明治43年以降使用されているが、大正8年出版の『相撲講話』（田中著）、大正13年1月号の『武俠世界』、昭和14年1月号の『野球界』などで見るように、大正時代と昭和10年代は黒が青より多く使われている。昭和32年出版の『行司と呼出し』（木村・前原著、p.66）によると、昭和32年には青が圧倒的に多くなっている。

このことから、青が圧倒的に多く使用されるようになったのは、おそらく、昭和20年代後半であろうと推測する<sup>15)</sup>。日本が経済的に豊かになり、青の繊維を豊富に生産できるようになり、青に対する伝統的な美意識が反映したに違いない。青と黒は同じ階級色なので、経済的に豊かになるにつれて、見栄えの鮮やかな青が徐々に増えていったのであろう。昭和20年代後半から30年代前半のことなので、はっきりした理由が見つかりそうだが、私はその理由をまだ文献で確認していない。たとえ文献で理由が述べてあったとしても、それが真の理由なのかどうかは吟味する必要がある。

このように、当初、調べて見たい項目の中では、ある程度解決できたものもあるが、まったく解決できないものもある。解決したと思っているも

のでも、実際は、真実とかけ離れているかもしれない。文献の記述を中心に調べてきたが、文献では事実を記述してあるだけで、その背景にまったく触れていないのが普通である。たとえば、幕下格以下の行司を二分し、上位を青、下位を黒と記述してあっても、なぜ青が上位なのかという説明はないのである。

もう一つ例を出せば、なぜ幕下格だけではなく、幕下格と三段目格を一つのグループに分けて青とするのかに、その理由を明確に述べた文献はない。実際、幕下格だけを青とし、三段目以下を黒とする文献も明治44年と大正5年にはあった。それが、大正10年以降は幕下格と三段目格を青、序二段格以下を黒とするようになっていく。この分け方が幕下格以下をほぼ均等に二等分できることは確かだが、実際に、その理由で分けたのかどうかははっきりしない。分け方の理由までは、どの文献でも説明していないのである。

#### 注

- 1) 謝辞：本稿をまとめるに際しては、明治から昭和までの相撲関連の雑誌や書籍等の閲覧で相撲博物館にお世話になった。また、27代から33代までの木村庄之助にも軍配房の色について教えていただいた。ここに改めて、感謝の意を表す。
- 2) 行司の階級色は現在とほとんど変わらないが、どの色がどの階級色かを明文化したものが無いというだけである。これは、慣習として受け継がれてきたものである。少なくとも明治30年ごろまでは地位としての最高色は紅であり、紫は名譽色である。たとえば、木村庄之助を襲名したからといって、直ちに紫房を使用したわけではない。
- 3) 明治時代の軍配房の階級色については、拙稿「軍配房の色」(2005)に詳しく扱っている。しかし、明治43年まで青の出現を裏付ける資料はまだ見つかっていない。
- 4) 『時事新報』(明治44年6月10日)では幕下格行司が青、三段目以下行司が青と書いてあるが、それが真実を反映しているかどうか分らない。幕下格以下で青が上位の色として確立していたなら、他の多くの文献でもそのような記述が見ら

れるはずである。しかし、明治から大正にいたる新聞や書籍ではほとんどの場合、幕下以下行司の色は黒としている。

- 5) これと同じ記述は『野球界』（大正9年1月号, p.48）にも見られる。幕下格が青房、三段目格以下が黒房だという記述はかなり少ない。幕下格以下で色を区別している場合は、三段目格と幕下格は青房、序二段格以下は黒房としているのが圧倒的である。
- 6) 十両格以上の色は現在と同じだが、幕内を緋または緋白、三役格を紫白としている。名称については吟味する必要があるかもしれないが、確かに幕下格を青房、三段目格以下を黒房として二分している。
- 7) 大正13年1月号の『武俠世界』の「行司の資格」(p.35)にも幕下格以下は黒のみである。そこでは青についての言及はない。立行司も紫のみで、紫白についての言及はない。
- 8) 『近世日本相撲史』（第3巻, p.19）によると、昭和26年春場所後、番付編成会議で副立行司の階級色として紫白が許されている。その会議で紫と白の割合まで決められたかどうかは分からない。春場所後に、木村庄三郎が副立行司になっている。
- 9) 『国技勸進相撲』は、実際は、死後3年後、20代木村庄之助のメモに基づいてまとめられている。軍配は身の回りの携帯品であるので、その房の色に関しては間違いないであろう。
- 10) 木村庄之助(22代)は本人自ら下位の頃、漢字の知識が豊富でなかったことを雑誌の対談記事等できどき告白している。『行司と呼出し』も前原氏との共著になっているが、口述筆記であろう。おそらく、その「あとがき」で示唆してあるように、小島貞二氏が文はまとめたに違いない。
- 11) 『大相撲』（昭和31年9月号, pp.28-29）では、「とめ色」以外なら、どの色を使用してもよいが、実際は、幕下格と三段目格は「青房」、序二段格以下は「黒房」を使用しているのだという。
- 12) 孫引きしていると判断したのは、昭和30年以降も依然として幕下格以下を二分した文献があるからである。昭和30年には幕下格以下の階級色は規定で明記されている。階級色に関する限り、規定以外の色と使ってよいという内規や慣習はない。
- 13) ここでは、幕下格以下を二分する文献を示してあるが、そのような分け方をしない文献が普通であることを喚起しておきたい。つまり、幕下格以下は青か黒であるとす文献である。これが正しい分け方だが、このような文献はあえて示していない。
- 14) 月刊誌『相撲』と『大相撲』では他の号や増刊号などでも同様な表現が何回か

見られる。雑誌の性質上、執筆者が異なるので、ときには幕下格以下行司がすべて青か黒になっていたり、ときには幕下格から三段目格までが青、二段目格以下が黒だったりしている。もちろん、前者が圧倒的に多い。昭和30年2月号『野球少年』の付録『大相撲力士写真大名鑑』の裏表紙に「行司の階級」がイラストで示しており、三段目格と幕下格は青房、序二段格以下は黒房として説明もされている。このイラストとキャプションは、行司の真の姿を反映していないものである。実際、その当時、行司であった元行司たちに尋ねてみたがそのような区別はなかったと言っているし、当時の相撲規定でもそのような区別をしていなかったからである。

- 15) 本稿を書き終わった後で、『角界時報』（昭和14年刊）をたまたま読んでみると、その中に「幕下までがすべて緑縵をもってその格式の表現としている」（p.7）というのがあった。これが正しければ、昭和14年までに幕下以下行司は「青房」が一般的だったことになる。残念ながら、それを補強する別の資料を持ち合わせていない。いずれにしても、「黒房」より「青房」が圧倒的に多く使われ出したのは、昭和20年以降ではなく、昭和14年以前かもしれない。もしこれが真実だとすれば、『大相撲』（昭和31年9月号、pp.28-29）で序二段格以下の行司が「黒房」だと述べていることは事実と一致していないことになる。

## 参考文献

相撲関連の雑誌（『相撲』、『大相撲』、『野球界』、『角力新報』、『国技』、『角力雑誌』、『角力世界』、『武俠世界』等）や明治時代の新聞等も参考にしたが、これらは参考文献では省略してある。ここで記すのは、いわゆる書籍の類だけである。出版年は奥付の書き方に従っている。

綾川五郎次、大正3年、『一味清風』、学生相撲道場設立事務所。

大ノ里萬助、昭和5年、『相撲の話』、誠文堂。

風見明、2002、『相撲、国技となる』、大修館書店。

北川博愛、明治44年、『相撲と武士道』、浅草国技館。

加藤進、昭和17年、『相撲』、愛国新聞社出版部。

金指基、2002、『相撲大事典』、現代書館。

川端要壽、1993、『物語日本相撲史』、筑摩書房。

木村喜平次、正徳4年、『相撲家伝鈔』（写本）。

木村庄之助（20代、松翁）、昭和17年、『国技勸進相撲』、言霊書房。

木村庄之助（22代）・前原太郎、昭和32年、『行司と呼出し』、ベースボール・マガジン社。

- 窪寺紘一, 1992, 『日本相撲大鑑』, 新人物往来社。
- 小泉葵南, 大正6年, 『お相撲さん物語』, 泰山房。
- 『新版相撲通になるまで』(『相撲』増刊), 昭和28年11月。
- 『相撲今と昔』(アサヒ写真ブック11), 昭和29年, 朝日新聞社。
- 『相撲大観』(相撲増刊), 昭和30年7月。
- 『相撲豆辞典』, 昭和30年5月, 朝日新聞社。
- 田中四郎左衛門(編), 大正8年, 『相撲講話』, 日本青年教育会。
- 寺尾政喜(編集兼発行人), 昭和14年6月, 『角界時報』, 角界時報発行所。
- 中沢潔, 昭和52年, 『相撲もの知り博士』, KKベストセラーズ。
- 日本相撲協会博物館運営委員会(監), 昭和50年～昭和56年, 『近世日本相撲史』(第1巻～第5巻), ベースボール・マガジン社。
- 根間弘海, 2005, 「軍配房の色」『専修経営学論集』第81号, pp.149-79。
- 根間弘海, 2005, 「軍配の握り方を巡って(上・中・下)」『相撲趣味』第146号～第148号, pp.42-53。
- 根間弘海, 2006, 「南部相撲の四角土俵と丸土俵」『専修経営学論集』第82号, pp.131-62。
- 根間弘海, 2006, 「軍配の型」『専修経営学論集』第82号, pp.163-201。
- 根間弘海, 2006, 『大相撲と歩んだ行司人生51年』, 33代木村庄之助と共著, 英宝社。
- 根間弘海, 2006, 「譲り団扇」『専修大学人文科学所月報』第223号, pp.39-65。
- 根間弘海, 2006, 「土俵の揚巻」『専修経営学論集』第83号, pp.245-76。
- 根間弘海, 2006, 「土俵の構築」『専修人文論集』第79号, pp.29-54。
- 半藤一利, 平成3年, 『大相撲こてんごてん』, 日本と書センター。
- 彦山光三, 昭和15年, 『相撲道綜鑑』, 国民体力協会／復刻版, 昭和52年。
- 彦山光三, 昭和16年, 『相撲美開眼』, 六興出版部刊。
- 彦山光三, 昭和27年, 『相撲読本』, 河出書房。
- 藤島秀光, 昭和16年, 『近代力士生活物語』／『力時代の思い出』, 国民体力協会。
- 舟橋聖一, 昭和18年, 『相撲記』, 創元社。
- 古河三樹, 昭和43年, 『江戸時代大相撲』, 雄山閣。
- 枅岡智・花坂吉兵衛, 昭和10年, 『相撲講本』, 相撲講本刊行会。
- 三木貞一(愛花)・山田伊之助(春塘), 明治35年, 『相撲大観』, 博文館。
- 山田伊之助(編), 明治34年, 『相撲大全』, 服部書店。
- 吉成勇(編), 1992, 『図録「日本相撲史」総覧』, 新人物往来社。